

100号記念 特別寄稿

私のオセアニア学ことはじめ その1

青柳まちこ (立教大学名誉教授)

1. 東京都立大学大学院受験

大学時代、語学に自信がなくて日本史を選んだ私が、何故わけも分からずに都立大学大学院の「社会人類学」などというものを受験することとなったかといえば、それは大学時代の恩師大森志郎先生の一人合点にある。私は日本史でも古文書を読むことに自信がなかったので、卒論の題目に「中世の東海道」を選んだ。足で書けば、その労に免じて、多少不備でも卒論を通してもらえるであろうという読みであった。所々は乗り物を利用したが、出発して14日目の夕方、京都三条の大橋に同行してくれた友人と2人でたどり着いた時には、さすがに達成感があった。ちなみに彼女は交通公社に入社し、後に雑誌『るぶ』の初代編集長となった。

卒業時、主婦の友社の入社試験に、「料理は卒業してから習います」と書いて見事に落ちて以後、モラトリアムというのだろうか、ろくに就活もせずに大学院へ行ってみようかと自宅に近い大学の大学院の日本史専攻を受験した。そのことを大森先生に話すと、先生は「そんな所つまらない。止めなさい」と言下に切り捨て、「都立大に今度、社会人類学というのができるそう。東海道を歩いたような人だから、そこを受けてみなさい。面白そうだよ」と独断的である。耳にしたこともない学問に私がきょとんとしていると、先生はその日のうちに行動を開始された。

夕方、大森先生に連れられて、私は阿佐ヶ谷にある岡正雄先生のお宅を訪ねた。生暖かい風の強く吹く春の宵であった。電話も不自由な時代だから、多分突然の訪問だったのであろう。岡先生は不在であった。すると大森先生は直ちに当時板橋の方に住んでおられた馬淵東一先生のお宅に向かった。たまたま在宅されていた馬淵先生に、大森先生は私を紹介され、今度都立大の大学院を受けるからよろしくと堂々と裏工作をなさる。馬淵先生もおそらく非常に驚かれたことと思うが、毎日新聞社から出版されたばかりの『人類の生活』を手渡され、「これを読んで受けにいらっしやい」とおっしゃった。

こんなわけで、私は五里夢中といった状態で、一日にして大森先生の敷いたレールに乗せられ、都立大の大学院を受ける羽目になってしまった。『人類の生活』は、一般読者向けに分かりやすく書かれているはずの本ではあるが、当時の私には本当に難解で、まったく頭に入らなかった。

試験当日、おそろおそろ出かけて行くと、受験生は2人である。英語、ドイツ語の語学試験を終え、論文試験は民俗学に引っ掛けて何とか書き上げた。翌日の面接では、岡、馬淵両先生に加えて、鈴木二郎先生、助手の住谷一彦氏が同席していた。面接でどんな質問を受けたかは記憶に残っていないが、ともかく何を聞かれても答えられなかったことは確

かである。しかし、何かの質問に私が「レスリー・ホワイトは・・・」と口走った所から、先生方は何故そんな名前を知っているのかと訝られた。すると馬淵先生が数日前の訪問の件をばらされ、『人類の生活』に書いてあるからだろうと説明された。すると岡先生も「そういう家にも来たそうだと私たちの訪問をばらしてしまわれた。

そのうちいつの間にか、先生方だけの雑談になり、この何も知らない受験生をどうしようかと、私の目の前で話し合われる始末である。ついに私が口を挟み「別に入れてくださいとお願いしているわけではないので、落として下さって結構です」というと、岡先生は眼鏡越しに優しい目で私をご覧になって「まあまあ、自分で勝手に決めなくてもいいよ」とおっしゃった。

こんな体たらくで試験を受け、それでも恥知らずに発表を見に行ったら、合格していた。同級生となるのは、現在、南山大学の名誉教授である山田隆治氏である。

2. 大学院の授業開始

都立大学の社会人類学専攻はその年度に開設されたばかりであった。昭和28年のことである。私が入学できたのは、先生方の温情もさることながら、今にして思えば、知名度のない学問の大学院で、文部省の認可が下りたばかりであったから、学生数は1人より2人の方がよいといった程度の事情があったためではないだろうか。

新設ということもあり、授業が始まったのは5月に入ってからである。スタッフは社会人類学コースでは岡、馬淵、鈴木の諸先生、さらに助手としては住谷一彦氏、祖父江孝男氏、蒲生正男氏というビッグスリー新進気鋭の研究者を揃えた、たいへん贅沢な研究室であった。さらに事務系の助手として、後にカナダのマックイル大学の教授となられる井川史子さんがおられた。

岡先生の授業は、W.Schmidtの『Handbuch der Methode der Kulturhistorischen Ethnologie』の講読であった。この本の数ページを毎回和訳していかなければならないのは、私には至難の業であった。ドイツ語にすばらしく強い山田君の助けがなければ、この授業にとってもついていけなかったに違いない。

馬淵先生の授業ではR.H.Lowieの『Primitive Societies』を読んだ。アパッチとかコマンチとか、今まで西部劇でしか名前を知らなかった人々が、現実に存在することを初めて知ったのも、この授業である。

オセアニア関係としては杉浦健一先生が非常勤で講義に来ておられた。先生は開口一番「最近の人はミクロネシアもポリネシアも区別がつかないのだから嫌になる」と言われた。私にはもちろんそんな地域名は初耳なので、質問されないようにひたすら小さくなっていた。やがて杉浦先生は、瞑目し陶酔ぎみの一人語りに入り、授業時間が過ぎても、一向に終わる気配はない。空腹感が強くなる頃、東大で杉浦先生のお弟子さんであった祖父江氏が、ドアをノックして授業の終了を知らせるということが何度かあった。

杉浦先生の授業の中で今でも覚えているのは、「ベテル・チューイング・ピープル」と

「カヴァ・ドリッキング・ピープル」の分布や、織機と編み機の区別と、太平洋における織機の分布である。いまだに私がマオリのケープは織物ではないと頑固に主張するのは、杉浦先生の教えである。

杉浦先生の授業は長くは続かなかった。ご病気がちで休講が多くなり、1年も経たないうちに、先生はお亡くなりになってしまった。後年私がパラオの調査を始めてから、先生のフィールドノートを見せていただく機会があったが、それには片面にA.Krämerの文章が原文でびっしりと記入されており、片面に先生の観察が書き込まれていた。先生はどちらかと言えば、実証派というよりは文献派だったのではないだろうか。昭和27年に出版された『人類学』は、文献の入手も困難な戦後の混乱期に、豊富な資料を用いて書かれた、当時ほぼ唯一の体系的な文化人類学の教科書であった。

3. 修論を書く

西も東も分からずに人類学に飛び込んできた私も、先生方のおかげで何とか1年目の単位を取得することができ、翌29年、内部から綾部恒雄（筑波大学名誉教授・故人）、青柳清孝（現国際基督教大学名誉教授）、高橋統一（現東洋大学名誉教授）の諸氏、それから前述の井川史子さんが進学してきた。

この年、都立大学に1年遅れて、東大大学院にも文化人類学の専攻が発足し、石田英一郎先生や泉精一先生による東大の授業も始まった。多くの場合東大の大学院生と一緒に授業で、私たちが東大に出かけたり、東大生が都立に現れたりしていた。石田先生の授業ではA.L. Kroeberの文化領域論やオイクメネの考え方、泉先生の授業ではユネスコ基金による社会的緊張の研究で、ダムの湖底に沈む宮崎県椎葉村の実地調査や、G.P.Murdockの『Social Structure』の講読が記憶に残っている。

社会人類学の研究室は3階にあったが、2階から3階に上がる階段の踊り場の片隅に、冬は石炭が貯蔵され、そこから各自が勝手に石炭を運んで来て、研究室のストーブに投げ込む。そのストーブを一同が取り囲んで、岡先生を中心に内外の人類学者の噂話に花が咲いた。噂話だけではなく、たまにはまじめな議論もあり、この時の耳学問が私には結構役に立った。

2年になるとそろそろ修士論文の準備を始めなければならないが、私には何をどうしてよいのか見当もつかず、相変わらずもたもたしていた。東海道を思い出し、馬淵先生に「交通に関係したことをやってみたいのですが」と、おそろおそろ口に出してみたが、先生の反応は芳しくなかった。

そんな私に岡先生から「双分制」をやってみないかという課題が出された。岡先生はウィーンで、シュミットの下で学ばれ、1933年ウィーン大学に提出された博士論文『古日本の文化層』では、かつて日本列島に2種の母系社会と2種の父系社会が存在したという仮説を立てられていた。当時はそのような論文を日本語で公にできる状況ではなかったが、敗戦によりヤマト民族の純粋性を声高に叫ぶ御用学者が一掃されて、学問の自由が保

障されるようになったため、先生はこの問題をもう一度考えてみようと思われたのではないだろうか。

文化史学派の創始者ともいえるF.Graebnerは、東パプア地域に双分制(Zweiklassensystem)文化圏を設定し、母権、仮面舞踏を有する男性秘密結社、物質文化では先太棍棒が特徴的であるとした。この考え方はシュミットとコッパース(W.Koppers)の外婚的・母権的文化圏に引き継がれ、この文化圏が純粋な形で見られるのは南海、とくにニューブリテン島、ニューヘブリデス諸島北部、またバンクス諸島であるとしている。この文化圏のもっとも明瞭な特徴は、1つの部族が2分され、自己の属する組ではなく、他の一組の成員と結婚する制度を持つことであり、子は母親の組に入れられるという。さらに農耕の発生、切妻屋根、メロディー楽器、神話では明るい月と暗い月の対立に代表される月神話などの文化要素も加えられた。

岡先生は、ご自身の母権文化圏とこの外婚的・母権的の関係を眺めようと、私に双分制を、また高橋統一氏に父権的社会的考察のために若者組の課題を、出されたのではないかと類推している。こうして修士論文では喧嘩祭りや宮座組織など、松平斉光先生や蒲生正男氏のお助けを借りて、日本各地の資料を収集し、また多くの文献がドイツ語であったためまたもや山田隆治氏の力にすがって何とか書き上げた。

こうして修士を3年かけて終了した。文化史学派の考え方の中では、質基準と量基準という概念によって、伝播を確定していく方法は興味深かったが、学説そのものは気宇壮大過ぎて、一応歴史科で史料の吟味ということを教えられてきた私には、どうもなじみなかった。そのため修士論文は文化史学派的な思考とはほど遠い物となってしまう、岡先生の仮説の傍証には役立たなかったと思われる。今改めて1958年に出版された石田英一郎先生司会による岡正雄、江上波夫、八幡一郎諸先生の座談会『日本民族の起源』を眺めてみたが、この中で岡先生は、双分制についてはまったく触れられていない。

しかし考えてみれば、これが私のオセアニアを垣間見る第一歩といえるかもしれない。何故ならばそもそも双分制文化圏は、グレーブナーによれば東パプア地域を中核とする南海の文化圏であったのだから。

4. 大学院博士課程へ進学

修士終了後、私は病気になったこともあったが、またもや無為の状況に陥り、なすこともなく日を過ごしていた。きっかけは再び大森先生である。彼は母校に非常勤講師の口を世話して下さったが、同時に、これからは博士号を取得していなければ、一人前の研究者とは認められないだろうからと博士課程に進学するよう勧められる。

こうして3年後に再び都立大に戻ってみると、かつての同僚たちは就職したり、留学したり、あるいは調査に出かけたりで、誰も居なかった。代わって山口昌男(東京外国語大学名誉教授)、永田修一(トロント大学名誉教授)、村武精一(東京都立大学名誉教授)などの多士済々たる諸氏が活躍していた。このあたりで私も同僚に倣って自分のフィールド

を決める必要があるかと気が付き、何ということなく太平洋、とくにニュージーランドに行きたいと考えるようになった。理由は定かではないが、結構消極的選択だったのだろう。

また馬淵先生の授業で読んだM.Sahlinsの「Social Stratification in Polynesia」という雑誌論文も影響していたのかもしれない。当時は親族研究花盛りで、サーリンズの資源配分と親族構造の関係を論じたこの論文、とくにラメージという階層化した非単系の親族組織は、日本の親族研究者たちの間でもよく引き合いに出され、同族と対比して議論されていた。

1960年、岡先生が明治大学に移られ、九州大学から古野清人先生が着任された。古野先生に太平洋に興味があるとご相談すると、先生は「それならハワイ大学が太平洋研究の中心地だからそこに行きなさい。ちょうど次回の太平洋会議がホノルルだからそこに行って、いろんな人に会って来なさい」とおっしゃる。といっても当時は、外国からの奨学金を得るなど特別な事情がなければ、個人の海外渡航は認められない時代であった。古野先生は早速ホノルル在住の旧知の井上天理教教会長に、私の身元引受人を依頼する手紙を出して下さった。古野先生のお手紙の威力は絶大で、教会員の目黒氏が面倒な手続きを引き受けスポンサーになって下さることが決まり、私のハワイ行きは、思わぬ早さで実現することとなった。

こうして1961年8月19日、私は前年に結婚したばかりの夫を残して、初めての（小学校入学前に住んでいた中国を除けば）、海外旅行に旅立った。公定レート1ドル360円、日本から持ち出すことができる外貨も制限つき、ハワイまでの直行便はなく、ウエーキ島で給油するという時代であった。

5. 太平洋学術会議

ハワイに来て最初のイベントは太平洋学術会議である。日本からは石田英一郎、馬淵東一、八幡一郎、国分直一、金子エリカ、浅井恵倫の諸先生が出席しておられた。学会の発表そのものは時差と、未熟な英語能力のゆえに睡魔に襲われ、ほとんど役に立たなかったが、誘われて毎晩のようにあちこちのパーティに顔を出した。こうしたパーティでK.P.Emory、L.Mason、K.Luomala、G.P.Murdock、F.Eggan、J.Barrau、M.Sahlins、R.Green、R.Duff、A.P.Vayda、D.Schneider、G.Condominas、H.C.Conklinなどという、名だたる大家に拝顔する栄に浴した。サーリンズ氏に「あなたの論文を授業で読みました」と言ったら、彼が丸い頭を妙に恥ずかしそうに振ったことを覚えている。またバロー氏に修論で調査した滋賀県中山の芋祭りの話をしたところ、ヌメアに遊びに来ないかという話に進展した。

こうして10日間の学会が終わり、9月半ばの雨の朝、私が大学への道を歩いていると、一台の車が止まり、便乗を呼びかけられた。車の主は日系人の女性で、大学で日本語の講師をしているという。そのうち「今、実は日本語のティーチング・アシスタントを探しているのだけれど」ということで、私は降って湧いたこの申し出に飛びついた。その足で

チェアマンに面接して採用が決まると、翌日移民局に行つて25ドル払い、身分を訪問者から大学院学生に変更する手続きをとつた。授業は来週から始まるという。

その頃私はJudd博士の家にベビーシッターと言う名目で居候していた。ジャッド家といえば、ハワイで知らぬ人はない有名な家系で、1827年、ニューヨークからハワイに移住した、医師で宣教師であつたGerrit Juddが初代である。彼は42年からはカメハメハ3世の顧問役となり、後にハワイ政府の幾つかの閣僚を務めている。代々医師の家系で、現在のジャッド博士は4代目に当たるそうである。まだ30代と思われたが、夫妻とも私のような突然現れた新参者を本当に親切に遇して下さつた。

この家はホノルル市街を一望に見下ろすタンテラスの山の上であり、眼下に戦死者を祀るパンチボールの墓地、右手に空港、さらにその先に真珠湾がきらきら輝いていた。市の騒音は全くなく、聞こえるのは鳥の声と夜半の烈しい雨の音だけである。市の水道もなく玄関脇の大きな水タンクを濾過して使用していた。

環境は抜群であつたが、大学へ毎日通うようになると、バスの停留所まで7マイルと聞くこの家はきわめて不便である。ジャッド夫人がハワイ大学の人類学出身と言うことで、友人のビショップ博物館に勤めるウィリアムソン夫妻の所有する市内の家が空き家になっているとのニュースが入つてきた。早速3人でその家を見に行き、大学までバスの乗り換えはあるものの、家賃はただ、芝の水撒きをすることという条件に、私は飛びつた。

ウィリアムソン氏は4分の1ハワイアン、夫人はかなり純粹に近いという黒髪のすなりとしたハワイアンであつた。娘と息子は本土の大学に留学中ということで私は娘のような地位を与えられ、たいへん可愛がってもらつたが、私の身長が気になるらしく、何フィートあるかと聞かれたり、椅子に座つたら足が床に届くかと年中からかわれたりした。

6. ハワイ大学での生活

こうして実感の湧かないうちに「アジア・太平洋学部」で日本語のティーチング助手となり、講師ともう1人の助手と共に一つの部屋を与えられた。給料は2週間で確か90ドル、与えられた机の上に置かれた、それまでに触つたこともない電動タイプライターのジーという音に興奮した。こうして1週間2クラス（火、木、土）の日本語教授助手と、大学院生としての生活が始まつた。

授業として取つたのは、まずルアマラ先生の「ポリネシア文化」である。厳しいと評判の彼女の授業は、ポリネシア文化の概説であつたが、1学期間に3回のテストと博物館レポートと言う膨大な調べ物が要求された。テストでは授業中に語られた事実に並んで、R.Suggs "The Island Civilizations of Polynesia" を読み、初回は1～4章、次回は5章から8章と言う範囲で出題される。クイズ形式で100問、たとえばこんな具合である。「下記の島はどの諸島にあるか？1. Tongareva, 2. Raiatea, 3.Hiva Oa, 4. Upolu, 5. Manua」
「マルケサス人は古典期最上の土器を出土した。正しいか正しくないか」このクイズは結構面白くて、私は大体80点代、最高94点を取つた。面白かつたので日本に帰つてきてこ

のクイズの真似をしたら、学生にこんな試験は大学の試験ではないと文句を言われてしまったが。

しかし博物館レポートは時間と労力を要する物であった。大きな課題としては食物（パンの実、タロ、ココナッツ、サツマイモ、カヴァ）、漁業（カツオ、サメ、ルヴェッタス、その他の漁獲物）、樹皮布、入れ墨があり、その他に自身で1つ何らかの題目を1つ選択する。そしてたとえば樹皮布の課題の下にはさらに以下のような質問が続く。①樹皮布とは何か説明せよ。②展示品の中から6つの樹皮布を選びその使用目的を述べよ。③樹皮布を製作している島、および製作していない島を述べ、それらが現存している理由、していない理由を述べよ。④樹皮布製作の過程を最初から最終段階まで述べよ。さらに東西の制作方法の違いにも触れること。⑤以下の博物館所蔵品のスケッチないしは写真を撮ること。Aカジノ木、B最初の段階で使用される丸型の打棒、次の段階で使用される方形の打棒、ハワイで使用される仕上げ打棒、C模様付けに用いられる各種の道具、⑥以下の樹皮布文様をスケッチすること。無地、単色、型なし模様、スタンプ型 板付け模様、水玉模様のデザインとそれに用いる打棒、⑦カットによるデザインの事例、⑧樹皮布接合の方法について6種類述べよ。⑨染色の方法について3種類・・・といった具合に問題用紙だけでも9ページにわたる。

大学の授業が終わってからビショップ博物館に行き、ケースの中を覗きこんでスケッチをしたり写真を撮ったりしていたが、ついに当時博物館の助手をしておられた篠藤喜彦先生が見かねて手を貸して下さることとなった。先生は問題用紙を覗き込んで、「次はタロのパウダーか。カウアイ型とその他の型ね」とかおっしゃって、博物館の倉庫から担いできて写真が取りやすいような場所に置いて下さる。本当に篠藤先生ご夫妻には公私共にお世話になった。

自由課題では私はポリネシアの楽器を選び、日曜日にも研究室で電動タイプを打って四苦八苦の上提出した結果、Aを得ることができた。努力賞といったところだろうが、レポートそのものは英語の間違いも多く、それをルアマラ先生は一つ一つ訂正してあるので、やはりこの教師魂には頭が下がった。

「ハワイ文化」の授業はビショップ博物館の重鎮、エモリー先生である。この授業では、ハワイ出土品のスライド上映が多く、暗い教室の中、先生の柔らかな語り口が常に睡魔を誘った。こちらの試験は日本風の記述式であった。

「ハワイ語」は太平洋言語の専門家として名高いS.H.Elbert先生である。受講生の大部分はハワイ語の話せないハワイ人学生であった。授業は1週間に3回で、毎金曜日には、ケアレ夫人がウクレレを持って先生と共に現れた。彼女は教授助手として私たちの発音を直す為に、何時もハワイアンソングを教えてくれた。車座になって彼女のウクレレに合わせて歌うハワイアンは、とても楽しく、人気のある授業であった。

ケアレ夫人はハワイのニイハウ島の出身である。ニイハウ島はハワイ諸島の北端にある長崎県の平戸島程度の島で、一般観光客はもちろん、政府関係者といえども許可なくして

は上陸できない。というのはこの島は、スコットランドからやって来た現当主ロビンソンの祖先シンクレアが、1864年に時のカメハメハV世からこの島を1万ドル買い取ったのだそうだ。ロビンソン家は1932年以来、極端な鎖国政策を取ってきたので、1961年ハワイ州知事がこの島を訪問した時には、30余年ぶりの訪問者ということで新聞紙面を賑わせていた。そんなわけで、ケアレ夫人のハワイ語は正当ハワイ語であったのであろう。ちなみに、現在ニイハウ島の人口は160人、今なおハワイ語が日常的に使用されているそうである。

ハワイ語の授業は楽しかったが、日本語の教授助手の仕事も結構忙しく、毎週クイズを出して、その採点を翌週までにやって返却しないと学生から文句が出るので、ついにこの授業は放棄してしまった。

私の教授助手の仕事は年限が決まっていなかったが、ここにそれほど長くいるわけにもいかない。1学期間働いて、パーティ用のムームであるホロムーも買えたし、ニュージーランドに行くお金もたまったので、この仕事を1学期限りで打ち切ることにして、私は再び旅立ちの準備を始めた。(続く)